

『ハイチとドミニカ共和国

—ひとつの島に共存するカリブ二国の発展と今—』

山岡加奈子 編

国際領域 宮石 幸雄

ハイチは現在ラテンアメリカの最貧国という不名誉な評価を受けています。50年以上も経済成長をしていないどころか、ハイチ大地震（2010年）やハリケーン・マシュー来襲（2016年）など重なる自然災害からの復興も進まず、破綻国家すれすれとまで言われる状況です。一方、ドミニカ共和国は、1990年代以降、民主国家として安定した成長を続け中進国に位置づけられます。工業製品輸出も拡大し観光業も好調です。この二つの国が、キューバの東隣イスパニョーラ島という北海道より少し小さい島に分立しています。これほど明暗がはっきりした国が島内で隣り合う例は世界でも稀でしょう。

本書は、スペイン及びフランスの植民地時代から、独立した19世紀初頭後の両国紛争の時代、米国による占領、独裁、民主化と続いた激動の20世紀、そして現代、の状況が比較分析されています。4名の分担執筆で、序章、1～5章、終章の構成になっています。各章は独立した内容なので、自分の関心の高いテーマから読めば良いでしょう。それぞれ興味深い分析、新たな知見が豊富に得られると思います。また、本書では複数の分析手法を使っており、「両国を見れば開発経済学がわかる、比較政治学がわかる、マクロ経済学が、福祉国家論がわかる、そして国際関係論がわかるというふうに」「それぞれの方法論についての理解を深めてもらうこと」（序章）も目指しています。

20世紀初頭から生活水準の向上が見られないと言われるハイチですが、18世紀にはフランスの植民地として砂糖生産などで莫大な富を生み、本国政府歳入の3割を賄った時期もありました。フランス革命に触発されて、ラテンアメリカで最初に独立を果たすと（1804年）、高い理想を掲げて奴隷制度廃止や農地解放などを行いました。このハイチ革命を守るためと称し、サントドミンゴ（現在のドミニカ共和国）を占領支配（1822～44年ほか）し、英国やフランスの介入を退けました。このように19世紀にはカリブの強国だったハイチが、同じ場所に存続しながら20世紀以降の貧しさに至ったのは何故か、本書は、開発経済学など各種手法を駆使した分析と各時代の国際関係についての豊富な文献により解明しています。

サントドミンゴは、コロンブスが第一回目航海で到達した地で（1492年）、16世紀初頭にスペインが最初の拠点として植民地にしました。しかしその後、スペインのアメリカ経営はカリブから大陸部に重心が移り、3

世紀もの間サントドミンゴの経済は停滞しました。18世紀、フランス領サントマング（現在のハイチ）で隆盛を極めた砂糖生産に対して、スペイン植民地サントドミンゴでは放牧や移動耕作、狩猟採集が専らでした。この差の要因を、スペインによる重商主義偏重など宗主国の貿易政策の違いに求める説明も興味深いものがあります。

20世紀に入り、両国の国力は逆転しますが、両国に共通して誕生した独裁政権の性格の対比も明晰です。ドミニカ共和国のトルヒージョ独裁政権では、弾圧、虐殺、私的蓄財など負の側面と同時に開発独裁として国家発展に寄与した面も指摘されています。農業に関しては農地分配・入植奨励によって食料自給が向上し、後には輸出志向の大規模農業も目指しました。これに対してハイチのデュバリエ独裁政権では「公的資源の私的流用」「私有財産の略奪」が横行し開発のための投資が進みませんでした。

以上は主に第1章「開発」及び第5章「国際関係」からのレビューです。第2章「政治」は20世紀以降現代までを中心として、米国による占領から独裁を経て民主化に至る激動の政治の経過を記述しています。第3章「経済」では、ハイチの停滞とドミニカ共和国の成長を豊富な資料で説明しています。第4章「社会政策」では、現地調査と広範な参考文献により外からわかりづらい医療や貧困問題などを含む人々の暮らしにも触れています。

巻末付録として44冊の「ハイチ・ドミニカ共和国関係文献解題」を列挙しています。ハイチ、ドミニカ共和国は、日本人にとってなじみの薄い国ですから、両国に興味を抱いた方にとって、日本語で読めるこれらの文献は有用な手がかりとなるでしょう。



『ハイチとドミニカ共和国—ひとつの島に共存するカリブ二国の発展と今—』
編者／山岡加奈子
出版年／2018年
発行所／アジア経済研究所